

化によって要請される女性像が変化している事例を取り上げたのが井上報告である。井上は、ポスト社会主義のロシアにおいて、ロシア正教会がアレクサンドラ皇后を通して描く「良妻賢母」像が近年存在感を増している状況を報告し、ソ連崩壊後の経済・社会変動がもたらした「家族主義」への転換がこの背景にあるとした。また、こうした「良妻賢母」像は「伝統」の再発見ではあるものの、実際にはロシア女性がこれまで経験したことのない「新しい役割」でもあると指摘した。

また日本の事例として、カトリック医療施設内における「天使の病棟訪問」と呼ばれるクリスマス行事を取り上げたのが石井報告である。近代的な病院の中でカトリックの伝統を意識する数少ない機会であるが、近年は中心的な担い手である看護師資格を有する修道女が減少しており、近代医療の現場でカトリックの理念を継承していくことの難しさについて言及した。また、女性修験者が、「在家」宗教者であるがゆえに、近代的な家庭生活との間で経験する様々な軋轢と、それを修験道の教えの中から克服していく過程、およびその問題点について小林が報告した。

以上四つの報告をふまえ、黒木氏からは、「ジェンダーの視点」とは何かパネリスト間で再確認が必要ではないかということと、「伝統」と「近代」の枠組みが大きすぎるのではないかという指摘を受けた。しかし、調査地や研究テーマを異にする研究者が、ジェンダーという共通の切り口から議論する機会を持つことは意義のあることであった。今後もこのような場を継続的につくっていきたい。

現代沖縄の社会、文化にみる

「本土化」と「沖縄化」の相互作用

代表者・司会 村上 興匡
コメンテータ 具志堅邦子

沖縄的死者慣行にみる

「本土化」と「沖縄化」の相互作用

村上 興匡

一九七二年の本土復帰にともない本土の慣習（葬祭業者による葬儀補助、仏教寺院による告別式葬儀）や、法律（「宗教法人法」「墓埋法」）、人間や業者（葬祭業者、石材業者）の沖縄への流入が進み、それが沖縄の死者慣行に変化を与えている。これは、いわば文化移入の側面でもとらえることもできるが、それを促進した背景には、都市化、近代化の影響がある。特に二〇〇五年以降、本土及び島嶼地域からの大量の人口が南部都市地域に流入しており、那覇周辺地域で大規模な都市再開発が進んで、地域社会、生業および地域の間関係に変化を与えたことが、本土的な慣習を取り入れる後押しをしていると考えられる。

「本土化」の一方で、所有地の中に自分の墓をもつ欲求が強かったり、本土式の家墓の中にも、従来の沖縄の墓と同様、段差や骨灰を撒ける穴があったり、葬儀や清明祭などの行事に多

くの親戚や近隣の人々が参加するなどの事例にみられるように、依然として沖繩独特の慣習や人間関係などが根強く残っている。

宗教法人や公益法人が管理する管理型霊園が作られるようになるのは、一九九三年に琉球メモリアルパークが、首里の達磨寺の管理でコザ中央霊園を開設したのが最初である。当時、民間の墓地管理財団法人は沖繩墓地公園管理協会だけで、首里公園、うぐいす谷墓地公園などを運営していたが、運営方法は、土地を分筆して個人に分譲し墓を建てさせるといったものだった。父親が沖繩出身で大阪の大手霊園開発会社の役員だった八城正明社長は、コザ中央霊園を開くにあたり、事前に沖繩県内の墓地のタイプや大きさ、分布状況について調査を行い、本土式家墓を考案した。本土と同様に石室の上に棹石が立てられ、多くは「○○家之墓」や「心」「平安」などの文字が刻まれている。本土の家墓は石室が地下にあるのに対して、沖繩のものは石室全体が地上にあるため高くなっている。石室内部に骨壺をおく段と骨をまけるイケが作られている点は、従来の沖繩の墓と同じである。現在、数多く普及している本土式家墓が一般化した時期は、九二年以降と考えられる。琉球メモリアルパークと同じ系列の石材会社が実質的に経営する、大阪の生駒霊園には、九二年より古い、大きな地上カポートをもち、棹石に沖繩姓が刻まれた「家墓」が複数存在している。現在、沖繩で見られる本土式家墓の原型にあたるものと推測できる。

大阪市大正区に住む沖繩出身者を数多く受け入れてきている浄土真宗S寺院の境内は狭く、本堂の上が納骨堂になっている

る。納骨堂を利用しない門徒との関係は弱い。沖繩的とも言えるし、都市開教の特徴とも言える。「琉球古真言T寺」の住職は、大正区に移住してからユタとしての霊能力が開花し、高野山真言宗の寺院住職の勧めで僧侶資格を取得した。大正区でユタ霊能が開花した「Iユタ」も吉野山の修験本宗の資格を取得している。沖繩の寺院からの聞き取りで、本土復帰以後、ユタであった田場道龍師が、宗教活動の公認のため多くのユタに、大阪の吉野山の修験本宗僧侶の伝手で僧侶資格を取得させたケースと酷似している。元々ユタ的な素質があり、佛敎大学の通信教育による僧侶資格を取得して、寺院を開設したという聞き取りも得られている。

大阪市大正区の沖繩コミュニティの社会的、文化慣習をみると、沖繩本島に先んじて、本土的慣習の「沖繩化」と類似のものがみられる。大正区の沖繩出身者たちは血縁をたどる形で移住してきており、特に第一世代の場合、本土復帰以後には、沖繩本島と行き来して、出身地域ともつながりを維持していたことが多くという。そうした中で、沖繩から本土に移住してきた人々の、本土的な社会的、文化的慣習への適応が逆移入される形で、沖繩での「本土化」の原型となったと解釈することができる。